

薬草百話 ④9

# チヨウセンゴミシ

●中国名 五味子 (北五味子) (Wù wèi zǐ)  
 ●学名 *Schisandra chinensis* (Turcz.) Baill  
 ●英語名 *schisandra, magnolia vine*  
 日本大学名誉教授 滝戸 道夫

先日、近所の小路を散歩して  
 いたら生垣に赤い実が丸く集つ  
 て垂れ下がっている蔓状の植物  
 を見かけた。かつて美男葛の  
 名で、蔓を水に浸して作った粘  
 る液を整髪料としたサネカズラ  
 の集合した果実である。この集  
 果は径が二センチもあって仲々  
 美しく道行く人の足を止めさせ  
 る。表題のチヨウセンゴミシは

このサネカズラと同様にマツブ  
 サ科の植物で、秋の山地の林中  
 では真っ赤な小さな実を穂状  
 に、葉の枯れ落ちた蔓に沢山付  
 けて目立っている。

マツブサ科はマツブサ属とサ  
 ネカズラ属の二属からなり、サ  
 ネカズラはサネカズラ属  
 (*Kadsura*) の植物で、チヨウセ  
 ンゴミシはマツブサ属  
 (*Schisandra*) の植物である。マ

ツブサ属の植物は双子葉で落葉  
 または常緑、芳香をもった蔓性  
 の木本で約二五種が世界に自生  
 し、その内一種が北米東部に、  
 他は東アジアに分布している。  
 日本には二種類自生しており、  
 その一種はチヨウセンゴミシで  
 本州の近畿地方から北海道、サ  
 ハリン、アムール地方、中国東  
 北部、朝鮮半島に分布し、長野  
 県、山梨県や北海道の落葉樹林  
 や林縁によく見られ、茎は五ミ  
 リほどの直径で他の木にからま  
 って一〇メートル以上も長く伸  
 びる。葉は楕円形又は倒卵形で  
 先が尖り互性、縁に鋸歯(ギザ  
 ギザ)が五〜一〇対あり、脈が  
 凹んでいる。初夏に新しい枝の  
 基部にある鱗片の腋から二〜三  
 センチの柄をつけた黄白色で直  
 径約一センチの芳香のある花を

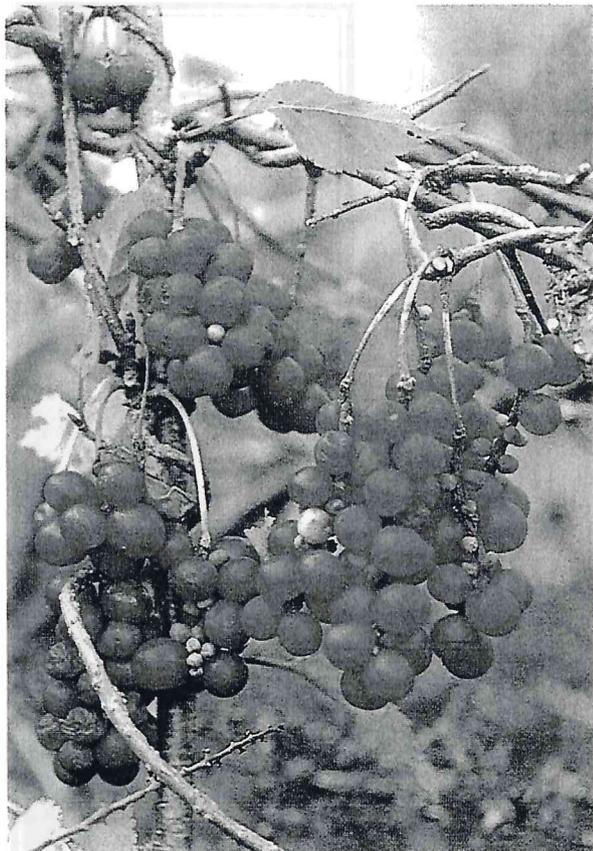
垂れ下げる。雌雄別株で、花被  
 は六〜九枚、雄花には六本のオ  
 シベ、雌花には多数のメシベが  
 ある。花が終わると、花床が伸  
 びて五〜一〇センチになり、多  
 くの液果を房状につける。果実  
 は一つの子房が発達したもの

(集合果)で房全体が一つの花か  
 ら出来たものである。液果は大  
 きさ不同の小球形で腎臓形の種  
 子を二〜二個持っている。こ  
 の果実は特有の辛酸味があつて  
 子供が喜んで食べる。また乾燥  
 したものを五味子(北五味子)  
 といって伝統薬である。他の一  
 種のマツブサ(*S. repanda*)は、  
 北海道、本州、四国、九州北部  
 やアジア東北部の落葉樹林の林  
 縁に生える落葉蔓性の木本植物  
 で、古い蔓の表皮はコルク状と  
 なり、松やにのような臭いがす  
 る。葉は短い枝の先に数枚集つ  
 て付き、広卵形で長さ四〜一〇



葎

▲チヨウセンゴミシ『詳解 国譯本草綱目』より



▲チョウセンゴミシの果実



▲チョウセンゴミシの花 (磯田進氏の写真)

センチ、厚く柔らかく、縁に少しく鋸歯がある。初夏に直径約一センチの淡黄白色の花を垂れ

下げて咲く。雌雄は異種で、果実は直径約一センチの球形でチヨウセンゴミシと異なり黒色に

と称する生薬を作り、五味子(北五味子)と同様に用いている。また、二色五味子 (*S. bicolor*) はマツブサによく似た種類で、種皮に瘤点凸起がある種で浙江、安徽、江蘇、湖南や広西の各省の山地に分布する。台湾にはアリサンマツブサ (*Sarisanensis*) が台湾の大平山、阿里山など湿度の高い深谷の叢林中に生えるという。韓国には『大韓植物図鑑』(李昌福著、一九八〇)によるとチヨウセンゴミシとそ

熟す。種子は扁平で腎臓形、表面に突起がある。変種にウラジロマツブサ (*var. hypoleuca*) がある。共に果実は食べられるし、蔓を乾燥して浴湯料にもする。  
中国には『中国高等植物図鑑補編』(一九八二)によると約二〇種が自生し、チヨウセンゴミシの外七種の記載が見られ、この中、中国の広地域(甘肅省、陝西省、山西省の南から雲南、江蘇、貴州、湖南、湖北、江西、江蘇省の各省など)に自生する华中五味子 (*S. sphenanthera*) の果実から『南五味子』

の果実から生薬五味子を作るが、この五味子の名の由来は『国訳本草綱目』(一九七五)によると、恭(蘇敬、『新修本草』(六九五)の著者の一人)は「五味は、皮、肉は甘く酸く、核中は辛く苦く、全体は鹹味(塩辛い)がある。それで五味が具るのだ……。」と云っている。また、生態、産地や品質については、陶弘景(梁の人、『本草経集注』(五〇〇)の著者)は「今は第一位のものは高麗の産で、肉が多くして酸く甜

の変種 (*var. glabra*) とマツブサとその変種の (*var. hypoglauca*) の四種が記載されている。またアメリカに生える種類 (*S. latifolia*) はアルバマ、ジョージア、フロリダ、アカンサス、ルイジアナなどの北米東南の各州に自生するという。  
なお、前述のサネカズラ属のサネカズラ (*K. japonica*) は、中国では植物名を紅骨蛇または日本五味子といい、南五味子 (*K. longipedunculata*) という中国名もあるので生薬の南五味子と混同して煩わしい。

い。次に青州（山東省益都県）冀州（河北省冀県）の産で、味が酸過ぎる。その核（種子）はいづれも猪腎（ブタの腎臓）に似たものだ。また建平（四川省巫山県東北）にあるものは、肉が少く、核の形が似てをらず、味が苦い。けれどもやはり良いものだ。この薬は膏潤が多いものだから、烈日（炎熱の太陽）に暴してから搗き篩ふがよし。」

と言ひ、蘇敬は「樹木の上に蔓生する。その葉は杏に似て大きく、子（果実）は房になつて落葵（ツルムラサキ）のやう、大いさは菓子（エビズルの果実）ほどのものだ。蒲州（山西省）及び藍田（山西省）の山中に産し、河中府（山西省）から毎歳貢納する。」と、韓保昇（五代十国時代の人、『蜀本草』（九三五〜六五）編者の一人）は「蔓性のもので、茎は赤色、花は黄白、子（果実）は生では青（緑）く、熟すれば紫だ。色にもやはり五色が具つてゐる。味は甘いものが佳し。」とし、蘇頌（宋の人、『図経本草』（一〇六二）の著者）は「現に河東（山西省）、陝西（陝西省）の州

郡に就中多く、杭（浙江省杭州）県、越（浙江省紹興県）地方にある。春初に苗が生え、赤い蔓が高い樹木に懸け延びて六七尺になり、葉は尖圓で杏葉に似てゐる。三、四月に黄白色で蓮花の状態に似た花を開き、七月實が成る。茎の端に叢生して豌豆ほどの大いさのものだ。生では青く、熟すれば紅紫になる。葉に入るには生で曝し、子（種子）を去らずに用ゐる。現に数種類あるが、大抵近いものだ。」と、雷斅（宋代の人か『雷公炮炙論』の著者）は、「小顆で皮が皴み、泡けたものは白い粉が鹽霜のやうに一重ある。その味は酸、鹹、苦、辛、甘の五味完全に具つたものが眞物だ」といつてゐる。また李時珍は「五味子は、現在のものには南、北の區別があつて、南方の産は色が紅く、北方の産は色が黒い。滋補薬に入れるには必ず北方産のものをを用ゐるが良し。根を取つて種をすることも可能で、その年の中に旺になる。また二月に子（種子）を種えれば翌年になつて旺になる。棚を作つて延び得るやうにするがよし。」と云

つており、これらの記述は現在のチヨウセンゴミシカ、或いは近縁の植物の生態および生葉の五味子の性状を表わしていると考えられるが、特に李時珍が北方産、南方産としている生葉の原料植物はチヨウセンゴミシカと华中五味子であろうか、或いは南五味子であろうか、定かでない。

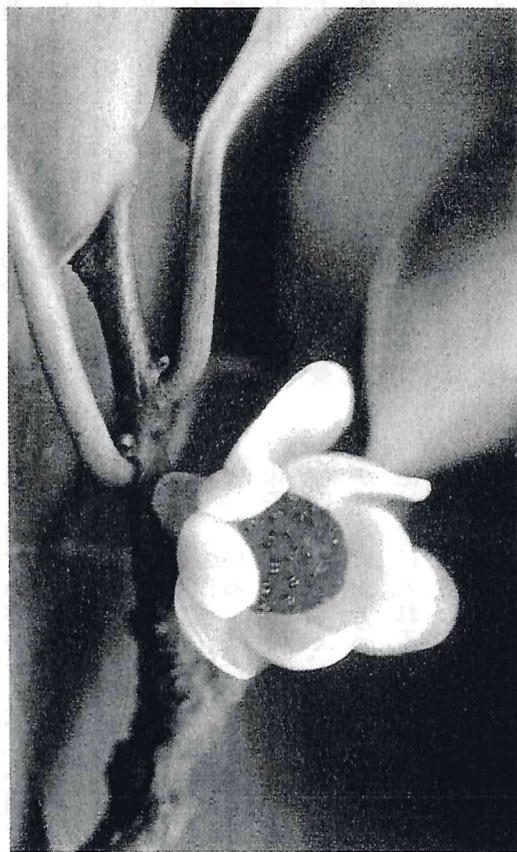
日本への薬としての五味子の導入は古く最古の本草書『本草和名』（九一八）に「五味」の項があり、和名として「佐祢加都良」の記載があり、また『倭名類聚鈔』（九三一〜七）にも五味の項に「作襴加豆良」の和名が記されている。従つて平安時代には薬として利用されていたと考えられる。室町時代の『福田方』（二二六三）にも記載が見られ、下がつて徳川時代初期の『多識編』（一六一二）には蔓草部、五味子の項に「左祢可都良」の名があり、伝統的に伝えられ、利用されていたと思われるが、その原料植物は何であったのか、「左祢可都良」は現在のサネカズラであるのか、不明である。しかし、中期初めの『大和

本草』（一七〇九）には「日本ノ五味子ハ味苦キノミニテ五味ナク滋補収斂ノ功ナクシテ性アシシユベカラズ」……「今倭俗倭五味子ノ莖ヲ水ニヒタシネハリヲ出ルヲ用テ鬢髪ニヌル毛チラズト云」とあり、此の項の国産の五味子はサネカズラであつたことが明らかである。

これはまた、『和漢三才圖會』（一七二二）に「按ずるに五味子は朝鮮之産が最も良し。中華之に次ぐ。倭之に次ぐ。日本處々に多く之れありて、紀州田辺之産良し。藝州廣島及日向、丹波之産之に次ぐ。其梗（乾た者形色甘草に似る）を水に浸し粘汁を取り、髪に塗る。甚だ佳し。俗に呼んで美軟石と名づく」とあつて、日本ではサネカズラ（ビナンカズラ）の果実も用いていたことが解る。しかし、江戸後期初めの著書『本草綱目啓蒙』（一八〇三）には「享保年間（一七一六〜三六）に「朝鮮ヨリ種ヲ渡ス。今人間ニ多ク栽。」と記され、「コノ種駿州ニ自生アリ。」と自生のものであると記し、マツブサの果実も和産の五味子の一種とし、



▲サネカズラの果実



▲サネカズラの花

サネカズラの果実は南五味子と  
している。また、同書には、  
「薬舗ニ販賣スル者数品アリ。」

朝鮮五味子ハ形大ニシテ久ヲ徑  
ルモノモ潤アリ。色黒クシテ白  
キカビノ如キモノアリ。五味全

テ備ル。尤モ上品ナリ。……  
略。漢渡五味子ハ実小ニシテ潤  
ナシ。サネカズラト同ジ。即南  
五味子ナリ。滋補ノ薬トナスニ  
宜シカラズ。然レドモ朝鮮ヨリ  
八年久ク渡ラズ。マレニ対州  
(対馬)ヨリスコシツツ来ルコ  
トアリ。色黒微赤ナリ。……  
略。今朝鮮ト名ツケ賣ルモノ数  
種アリ。多クハ尾州(尾張国)  
ヨリ出ヅルヲ朝鮮五味子トイ  
フ。コレ名古屋五味子ナリ。粒  
大ニ黒色潤アルモノハ朝鮮ニ異  
ナラズ。宜ク用フベシ。又マツ  
ブサノ実ヲ賣ルモノアリ。通用  
シテ可ナリ。其粒小ナルモノハ  
南五味子ヲ煮テ色ヲ黒クシ味  
ヲツケ乾タル者ナリ。用ユル  
ニ堪エズ。」と記述しており、  
また『古方薬品考』(一八四

一)には選品の項に、「五味子  
数種アリ。其朝鮮ノ産ハ粒ガ  
胡椒ニ似テ小サク黒色デ滋潤  
デ味酸ク微ニ甘ク、其ノ核  
(種子)ハ苦ク香シキモノヲ最  
上トナス。薬舗デハ此ヲ本朝  
鮮と稱ス。或ハ黒五味子ト呼  
ブ。李時珍ノ所謂北五味子ハ  
是ナリ。凡ソ試ルニ其ノ核ハ  
黄蜀葵子(トコロアオイの種

子)ノ如クニシテ赭色(赤褐  
色)ノモノ真ナリ。享保中朝鮮  
之種ヲ傳フ。今人間ニ之ヲ栽  
ユ。其ノ實秋熟シ紅紫色、蒸シ  
乾スト色ハ黒ク、朝鮮ノ産ト別  
無シ。未ダ薬舗ニ出デズ。又邦  
産ノ者デ方言デ末都部左ハ其ノ  
粒ハ朝鮮産ノ如キデ大キサ之ニ  
倍ス。色ハ紫黒デ滋潤、氣味ハ  
相似テイル。但シ酸味ハ厚カラ  
ズ、之ニ次グ。呼ンデ熟五味子  
トナス。復之ヲ蒸スモノヲ大蒸  
ト呼ブ。凡ソ黒色滋潤ナルモノ  
俱ニ用フベシ。其ノ未熟デ淡赭  
色デ滋味ノ薄キモノ下品ナリ。  
和州宇陀、紀州熊野ニ生ズ。  
又名護屋五味子ハ其ノ粒ハ上ニ  
同ジニシテ色紫赤デ皮上ハ白ク  
霜ノ如シ、味ハ酸鹹ニシテ滋潤  
微モノ下品ナリ。信州ノ山谷ニ  
生ズ。皆名護屋ニ轉メテ之ヲ製  
ス故ニ名ヅク。是レ市人其ノ未  
熟ニシテ小ナルモヲ取りテ製ス  
ルニ醋ヲ以テス。故ニ皮上ニ霜  
ヲ發ス。(粉吹五味子ト呼ブ)。  
此ヲ偽ツテ朝鮮五味子ト呼ブ。  
又小蒸五味子有リ。其ノ粒小ニ  
シテ色黒ク味苦シ。是南五味子  
ニシテ眞ニアラズ。或ハ商人烏  
梅(くん製した梅)ノ煎汁ヲ用

子)ノ如クニシテ赭色(赤褐  
色)ノモノ真ナリ。享保中朝鮮  
之種ヲ傳フ。今人間ニ之ヲ栽  
ユ。其ノ實秋熟シ紅紫色、蒸シ  
乾スト色ハ黒ク、朝鮮ノ産ト別  
無シ。未ダ薬舗ニ出デズ。又邦  
産ノ者デ方言デ末都部左ハ其ノ  
粒ハ朝鮮産ノ如キデ大キサ之ニ  
倍ス。色ハ紫黒デ滋潤、氣味ハ  
相似テイル。但シ酸味ハ厚カラ  
ズ、之ニ次グ。呼ンデ熟五味子  
トナス。復之ヲ蒸スモノヲ大蒸  
ト呼ブ。凡ソ黒色滋潤ナルモノ  
俱ニ用フベシ。其ノ未熟デ淡赭  
色デ滋味ノ薄キモノ下品ナリ。  
和州宇陀、紀州熊野ニ生ズ。  
又名護屋五味子ハ其ノ粒ハ上ニ  
同ジニシテ色紫赤デ皮上ハ白ク  
霜ノ如シ、味ハ酸鹹ニシテ滋潤  
微モノ下品ナリ。信州ノ山谷ニ  
生ズ。皆名護屋ニ轉メテ之ヲ製  
ス故ニ名ヅク。是レ市人其ノ未  
熟ニシテ小ナルモヲ取りテ製ス  
ルニ醋ヲ以テス。故ニ皮上ニ霜  
ヲ發ス。(粉吹五味子ト呼ブ)。  
此ヲ偽ツテ朝鮮五味子ト呼ブ。  
又小蒸五味子有リ。其ノ粒小ニ  
シテ色黒ク味苦シ。是南五味子  
ニシテ眞ニアラズ。或ハ商人烏  
梅(くん製した梅)ノ煎汁ヲ用

テ之ヲ染メテ酸ク且ツ黒カラシメルモノアリ。用イルニ堪エズ。」と記載してある。

この様に徳川時代の市場の五味子には、蒸したり、酢を使ったり、或いは烏梅を利用したりして加工した種々の商品があったが、朝鮮から輸入されるものが最上級で、渡来した種子から栽培したり、自生のチヨウセンゴミシから作った良品の五味子があり、また、野生のマツサの果実から作った次品の五味子があり、医療には利用できないサネカズラから作った南五味子もあったようである。

なお、『中華人民共和国薬典』(二〇〇〇)には「五味子(北五味子)」と「南五味子」が規定されており、前者はチヨウセンゴミシの乾燥成熟果実とし、後者は华中五味子の乾燥成熟果実とし、全く同じ薬能をもつ薬物として記載されている。

『日本薬局方』(二〇〇一)ではチヨウセンゴミシの果実のみが「ゴミシ(五味子)」の名で規定されている。

品質の鑑別については『和漢薬の良否鑑別法及調製法』(一

九二九版)に「表面に皺紋があつて、紫黒色を呈する大粒の甘味のあるものが良品でありま

す。朝鮮五味子と云ふのは表面紅色で濕めると白い粉が一ぱいに吹いて白色のやうに見えます故、市場では白五味子といつて居ります。然し之を蒸すと又元の如く紅くなります。調製法は両手切にて細かく剉み、皮核共に應用いたします。」と記述されている。

現在、日本の市場には国産品は無く、二〇〇〇年には中国や北朝鮮から約六〇トン輸入されている。

五味子の薬能については『国譯本草綱目』の「主治」の項によると、『神農本草経』には「氣を益し、效逆上氣(咳嗽して喘する) 勞傷羸瘦(疲勞して倦怠し、やせ衰える) に不足を補し、陰を強め、男子の精を益す」とあり、『名医別録』(陶弘景著)では「五臓を養い、熱を除き、陰中(膾)の肌(筋肉)を生ずる」といい、甄權(唐代の人、『薬性本草』の著者?)は「中を治し、氣を下し、嘔逆を止め、虚勞を補し、人体を悦

懌(喜び)ならしめる」と、大明(日華子大明?)、宋の人、『日華諸家本草』の著者?)は、「目を明にし、水臓(腎臓、膀胱など)を暖め、筋骨を壯にし、風を治し、食物を消化する。反胃(もどす)、霍亂轉筋(こぐらがえり)、痲痺(臍と脇の間の塊)、奔豚(腎に結塊ができて気が上衝し、発作を起こす)、冷氣、水腫、心、腹の氣脹を消し、渴を止め、煩熱を除き、酒毒を解す。」と、李杲(金代の人、『脾胃論』(一二四九)の著者)は、「津を生じ、渴を止め、瀉痢を治し、元氣不足を補し、耗散(消散)の氣、瞳子(瞳孔)の散大を収める」と、好古(王好古、元の人、『湯液本草』(一二九一)の著者)は、「喘欬(喘して咳をする)、燥嗽(強い咳)を治し、水を壯にし、陽を鎮める」と記している。

『本草備要』(汪昂著、一六九四)には、「肺腎ヲ補ヒ精氣ヲ瀦(澁)ス」とし、「性ハ温、五味俱ニ備ハル。酸鹹多トナス。故ニ専ラ肺氣ヲ收斂シ、腎水ヲ滋ス。氣ヲ益シ津ヲ生

ジ、陰ヲ強メ精ヲ瀦シ、虚ヲ補ヒ目ヲ明ラカニス。熱ヲ退ケ、汗ヲ斂メ、嘔ヲ止メ瀉ヲ住メ、嗽ヲ寧ラカニシ喘ヲ定ム。煩渴ヲ除キ、水腫ヲ消シ酒毒ヲ解ス。散耗之氣、瞳子散大ヲ収ム。嗽初メテ起リ、脈數ニシテ實火有ル者ハ用フルコトヲ忌ム。北産ノ紫黒ナル者ハ良シ、滋補ノ薬ニ入ルルハ蜜ニ浸シ蒸ス、勞嗽ノ薬ニ入ルルハ生ニテ用フ。俱ニ槌ニテ核ヲ碎ク。南産ハ色紅ニシテ而枯ル、若シ風寒肺ニ在レバ、菴蓉(ホンオニク)ハ使ト為ス。萎蕤(アマドコロ)ヲ惡ム。熬膏(エキスを火にかけて練った膏)シテ良シ。」と記述している。

日本の書物では『薬徴』には「咳して冒する者を主治するなり」と記述し、「弁誤」の項に「余嘗て本草を読むに、五味子収肺補腎の言あり。是れ疾医の言にあらざるなり。その説たる、五臓の生剋(五臓を五行に配当して、互に相生相剋する)という五行説にもとづくもの)に由つて来るに原づく。夫れ疾医の道熄(消)す、邪術起り、憶測の説、是において行はる。

治に益なし。従うべからず」と記述し、後世派の考えを是としていない。それで、『古方薬品考』（一八四一）では、「其能潤渴（枯渴）ヲ潤暢（潤つて滞りをなくする）シ、肺氣逆上ヲ鎮瀉メ、以テ欬嗽喘息ヲ治ス」とあり、また、『皇漢医学』（一九二七）では、「五味子は収斂性鎮咳薬にして兼ねるに治冒作用を有する温薬なりと云うべし」と述べている。

現行の『中華人民共和国药典』では五味子（北五味子）の性は酸、甘、温とし、帰経を肺、心、腎とし、「収斂固滋、益氣生津、補腎寧心の功能があつて久嗽虚喘、夢遺滑精（夢失精）、遺尿尿頻、久瀉不止、自汗、盗汗（寝汗）、津傷口渴、短氣脉虚、内熱消渴（のどが渇く、水をのむ）、心悸（心脚部の不安感がある症）失眠を主治する」とあり、南五味子についても全く同様に記されている。

日本での五味子の利用は専ら漢方処方薬として使われており、配剤されている小青竜湯、小青竜湯加石膏、小青竜湯合麻杏甘石湯や香蘇散は、鎮咳祛痰

薬、抗喘息薬、鼻炎用薬とし、嘔声（しわがれ声）用薬に補肺湯を、また、一種の強壯薬として人参、黄耆や甘草の入った清暑益氣湯や人参養榮湯を、また、香蘇散が胃腸虚弱な人の感冒の初期や魚類による蕁麻疹などの治療に用いられている。

『中薬現代研究与臨床応用』（一九九四）によると、中国では「臨床応用」として喘息の治療に五味子に地龍と十薬を合方した煎剤を用い、盗汗に五味子と同量の五倍子の末にアルコールを少量加えて作った湖剤を臍上に塗って治療している。神経官能症に四〇〜一〇〇%の五味子のチンキ剤を、慢性肝炎に五味子の蜜丸を服用し、七〇%の五味子のチンキ剤を難産に用い、それぞれ良い効果を挙げているという。

近年の五味子の化学および薬理学研究では、揮発性成分を約〇・六%含み、ピネン、P-サイメンなどのモノテルペンの他、多量のセスキテルペン化合物のカジネン（五・三%）、イランジエン（一六%）、クパレン（二・五%）などが検出され

ている。生理活性の主成分はジベンゾチクロオクタジエン型のリグナン化合物であるシサンドリン、ゴミシンA、D、F、G、J、N、デオキシシサンドリンなどである。リグナン化合物中、ゴミシンAには中枢抑制、又はトランキライザー様作用、鎮咳作用、ストレス胃潰瘍予防作用、抗炎症作用、抗アレルギー作用及び利尿作用が、シサンドリンには中枢抑制、又はトランキライザー様作用、鎮痛作用、胃液分泌作用、ストレス胃潰瘍予防作用及び利胆作用が認められている。またゴミシンJにはカルシウム依存性平滑筋収縮の抑制作用があり、またゴミシンA、シサンドリンやウエイジスCなどには肝細胞障害抑制、肝繊維化抑制、肝再生促進、肝機能亢進などの肝臓機能を

を増進させる働きがあることも証明されている。また、私達の研究ではゴミシンAには抗発癌プロモーション作用のあることも判明した。これらの薬理実験は五味子の薬能の一部を裏付けるものである。また、五味子にはクエン酸、リンゴ酸や酒石酸などの酸が含まれており、これらが五味の味を出すのであるか。

なお、『中華人民共和国药典』には醋五味子という修治した生薬があり、また、江戸時代には蒸五味子、蜜五味子もあつたようであるので、これらの生薬の効力を研究しなければならぬだろうし、また、果肉と種子との成分、薬効の違いや五味の五つの味は何に基因するのもも研究したいものである。



滝戸 道夫  
(たきど・みちお)

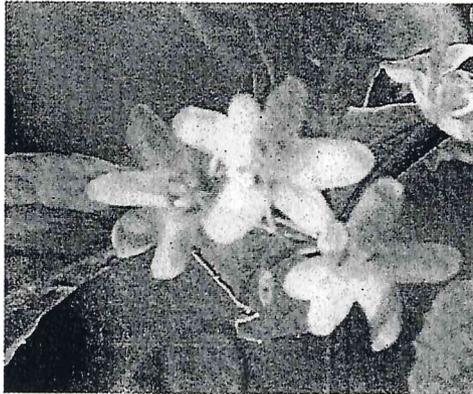
大正十四年 静岡県生まれ  
昭和二十二年 星薬学専門学校(現・星薬科大学) 卒業  
昭和二十四年 東京大学医学部薬学科選科修了  
昭和四十二年 日本大学理工学部薬学科(現・薬学部) 教授  
現在 日本大学名誉教授 薬学博士  
東京大学総合研究博物館協力研究員

和漢薬の選品③⑥

## 五味子の選定

株式会社ツムラ 常務取締役

岡田 稔



『和語本草綱目』に「此レガ皮肉ノ味甘酸核中ノ味辛苦都テニ鹹味ヲ含ム實ニ五味ヲ全ク具ル、故ニ名テ五味子トス・五味子ハ和産宜シカラズ朝鮮國ヨリ來ル者ヲ良トス」と語源が解説される。五感に基く評価法は、現今でも通ずる一判定基準となる。原植物はチヨウセンゴミシ・*Schisandra chinensis* (Turcz) Baillon、長さ8mに達する落葉木質の多年生藤本である。蔓は右巻きに伸び、茎は灰褐色、小枝は褐色でわずかに稜角がある。単葉が互生し、葉柄は長く一四cm、若いうちは紅色を帯びる。葉身は薄く、広楕円形、倒卵円形或いは倒卵形、長さ五〜一七cm、幅三〜七cm、先端は急に尖るか、鋭く尖り、基部は楔形、広い楔形或いは円形、縁には波状の小鋸歯がある。上面は緑色で無毛、下面は淡緑色で、時に灰白色或いは葉脈に沿って短柔毛を有する。花は単性、雌雄異株で稀に雌雄同株。乳白色か石灰色。五〜七月、広い鐘形の白色花一〜三花を葉腋に集生し、下垂する(写真1)。雌花の花被

は六〜九枚、雄しべは多数、花托にらせん状に並ぶ。子房は倒洋梨形、花柱はなく、落下後、花托は成長して穗状になる。雄花は長い花柄を持つ。花被は六〜九枚。楕円形、雄しべは五本が基部に合生する。果実は液果で径五〜七mmの球形、熟すと赤色になる(写真2)。この果実が生薬五味子となる。わが国中部以北の山地、朝鮮半島、中国の遼寧省、黒龍江、吉林省、河北省及びシベリア各地に同じ種類の植物が分布するが、本草各書での産地の記述は『本草綱目』で「五味ハ現在ノモノニハ南北ノ區別ガアツテ、南方ノ産ハ色ガ紅ク、北方ノ産ハ色ガ黒イ。滋補薬ニ入レルニハ必ず北方産ノモノヲ用イルガ良シ・所謂北五味子是レ也。凡試ルニ其核黄蜀葵子ノ如クシテ赭色者眞享保中ニ朝鮮ノ種ヲ傳フ、今人間ニ之ヲ栽ユ其實秋紅紫色ニ熟シ蒸シ乾ス則色黒ク朝鮮産ト別無シ・・・」、『大和本草』に「朝鮮ノ産ヲ用フ可シ、醫書ニ遼五味子ト云ウ是ナリ、北五味子ト云頭大ニシテ色黒ク、潤ガ有リ、

味ハ五味ヲ有シ、甚酸シ、核(タネ)アカシ、日本ノ五味子ハ味苦キノミニテ五味ナク滋補収斂ノ功ナクシテ性アシシ、用ユヘカラス、唐五味子顆小ニシテ苦ク燥ケリ倭五味ニマサル、然トモ遼五味子ニオトレリ、朝鮮ヨリ來ルハ實ハ苦辛ク皮ハ甘ク酸クシテ皮實スヘテ鹹シ一物ニテ五味全ク備ル事奇也是眞五味子ナリ草木ノ實ニ鹹味アルハ稀ナリ・・・」、『重修本草綱目啓蒙』では「南北ノ異アリ朝鮮ノ産ヲ遼五味子トシ又北五味子ト呼ブ朝鮮ハ唐山ノ北ニ當ル故ナリ享保年中ニ朝鮮ヨリ種ヲ渡ス今人間ニ多ク栽ユ・・・」、『和漢三才図会』「五味子朝鮮之産最良ナリ中華之二次倭亦之次日本多有」、『古方藥品考』に「五味子數種アリ、其朝鮮産粒胡椒ニ似テ小サクテ、黒色デ、滋潤味酸ク微甘ク其核苦ク辛ク香キ者ヲ最上ト為ス・・・」など、何れも朝鮮半島の生産物を特質している。事実日本への輸入はかつては朝鮮半島特に南朝鮮からが主流を極めたが、集荷人の減少から、近年の供給は中国東北地区に依存



写真2 黒龍江五味子



写真1 チョウセンゴミシ

する。薬能に関して『神農本草經』の「五味、益氣、亥逆上氣、勞傷羸瘦、補不足、強陰益男子精」を初めとして、『日華子本草』に「目を明らかにし、腎臓を補い、筋骨を壮にし、風湿を治し、食を消し、吐瀉、抽筋、水腫、腹の脹氣を消し、低熱を退かせ、渴を止め、酒毒を解く」と記載、他多くの古典書に「咳して冒するものを主治す」「収斂性鎮咳にして兼ねるに治冒作用を有する温藥なり」「咳逆上氣を主り、渴を止め、煩熱を除く」「水毒の上衝を治する効がある、その結果として咳逆上氣を去り渴を治する、故に咳嗽がなくても使用するこがある」など、滋養強壯、體質虚弱、疲労倦怠感、脱力感、無氣力、息切れ、動悸、多汗、口の渴き、咳、喘息、健胃、強壯、浄血、美肌と広範な利用の示唆が見られる。五味子酒にして、杯に半分位を就寝前に服用すると冷え性、低血圧症、不眠症、滋養強壯の効果があるとする、民間薬的触れ込みもあるが、主には漢方薬方劑小青竜湯、苓甘姜味辛夏湯、清暑益氣湯、人

參養榮湯、清肺湯、麦門湯などに配劑し応用される。方劑中では乾姜、細辛共に用いられることが多い。中国を流浪した経験では神経が高ぶり、眠れない時、また頭痛、眩暈を感じる時など神経衰弱気味の人に服用して改善し、回復した例が紹介され、且つ、体力増強、元氣回復、記憶力旺盛、煩燥不安除去、日常の生活に欠かせないとま

で言われ、高い評価があり、薬膳料理、食膳料理に用いられている。「記憶加強湯」など、商品としての販売もある。生薬への調製は十月頃果実が熟して、深い赤色を呈し

脱落する前に果穂を摘み取り、陽乾する。生薬の性状(写真3)は不規則な球形、偏球形を呈し、径五〜八mm、外面は暗赤色、紫紅色、黒褐色で、しわがあり、また、時に霜降り状に白い粉をつける。種子は一〜二粒を含み、

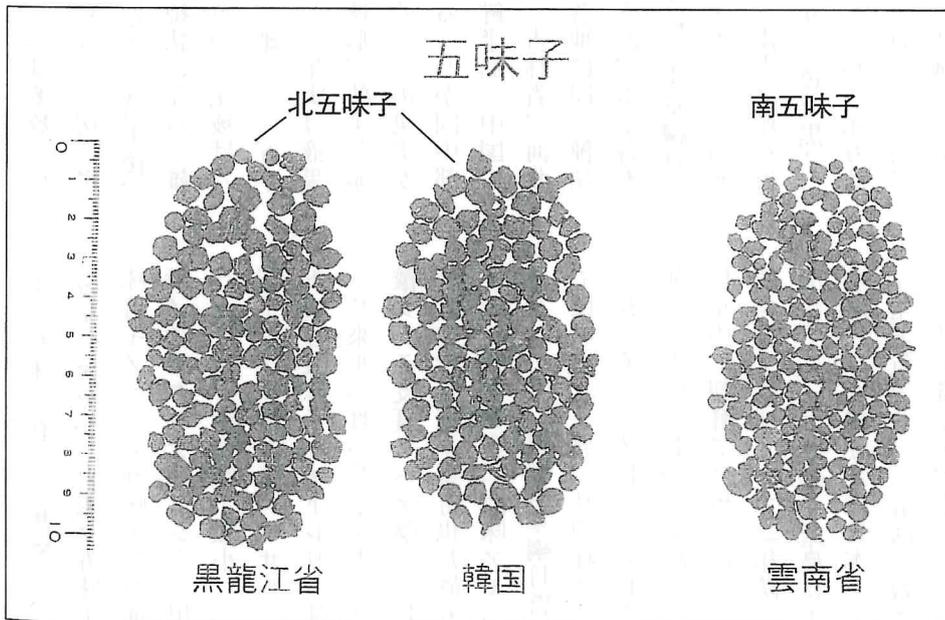


写真3

また、時に霜降り状に白い粉をつける。種子は一〜二粒を含み、

腎臓形を呈し、長さ四〜五mm、幅三〜四mm、外面は黄褐色から暗赤褐色でつやがあり、背面には明らかな縫線を認める(図1)。外種皮はたやすく剥がれるが、内種皮は胚乳に密着する。果実の横切片を顕微鏡で観察すると(図2)、切面の全形は楕円形或いは類円形を呈し、果肉は厚い。種子の組織は切面の径の2/3〜3/4を占める。最外層は外果皮で、外側1列の表皮は方形〜長方形の細胞からなり、壁はやや厚く、外側は角質化し、細胞間には油細胞が見られる。中果皮は十数層の薄壁細胞で、各細胞は接線方向に長い、外層の細胞壁はやや厚く、内層の細胞の壁は薄い。細胞内にはでんぷん粒が充満する。この細胞層の中に小さな外師維管束が散在する。内果皮は方形の薄壁細胞が1列配列する。種皮は三〜五層の石細胞層及び数層の薄壁細胞から成る。石細胞層は3形があり、外層の1列は表皮で長さ四五〜七〇μm、径二五〜三〇μm長方形の石細胞で柵状に配列、壁は肥厚している。胞腔内には赤褐色

の物質を含む。続く層は類円形、三角形、多角形等を呈し、径八〇〜一三〇μmの比較的に大きな細胞で、壁は厚いが膜孔も大きい。胞腔内には赤褐色の物質を

含む。内層の細胞層は長さ八〇〜一二〇μm、楕円形、多角形の細胞で不規則な配列をし、細胞壁は薄い。油細胞層があり、細胞は長方形で、径六五〜八五μm、

黄褐色〜褐色の油を含む。その内外には類円形、多角形を呈した薄壁細胞が三〜四層配列、内側の薄壁細胞中には維管束が存在する。種皮の内表皮は類方形

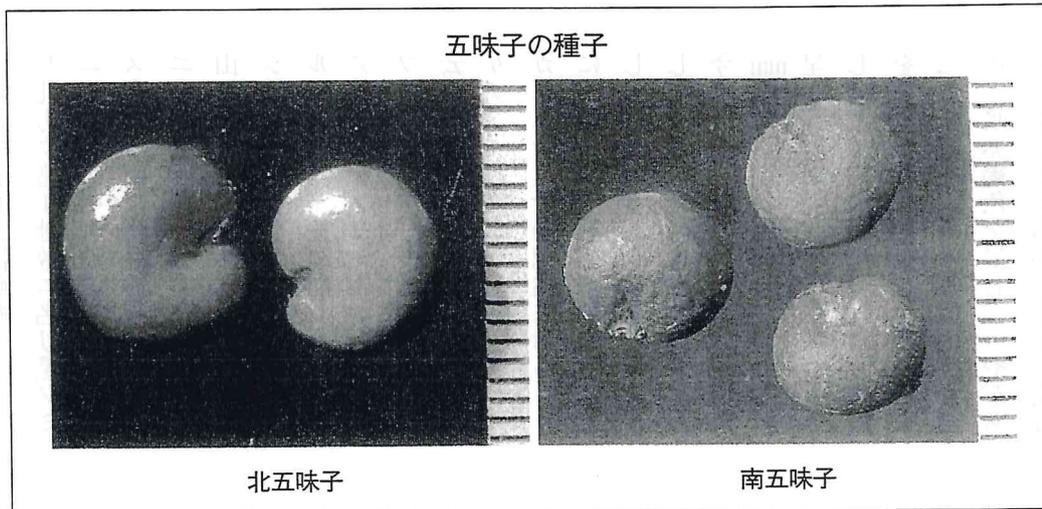
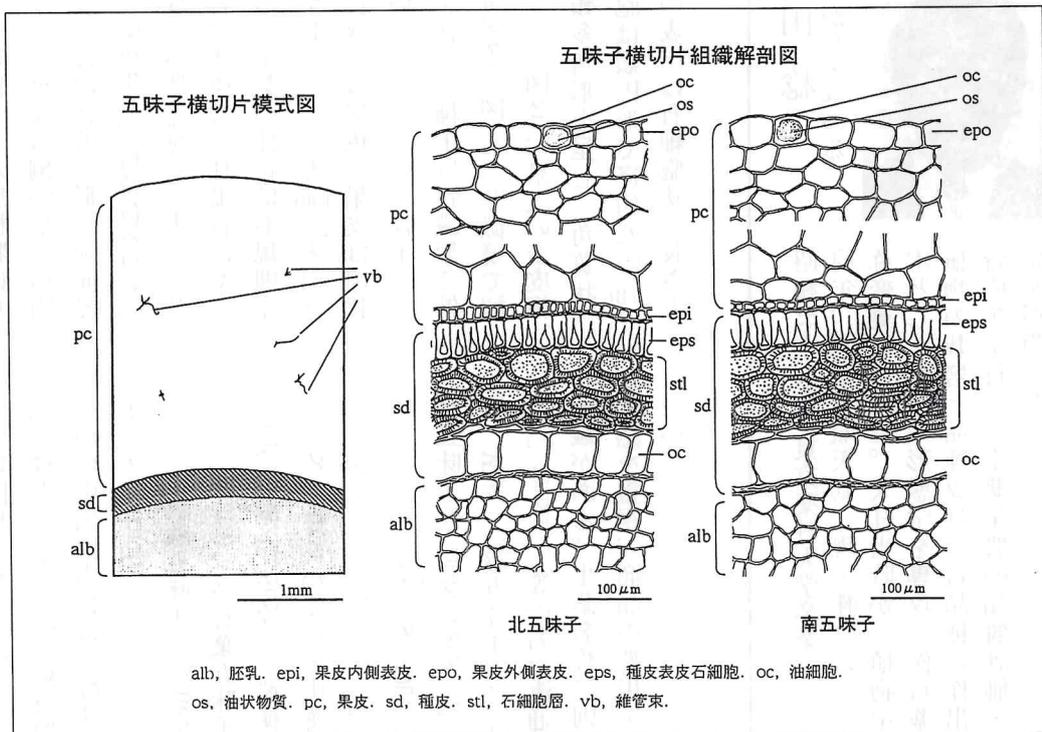


図1



alb, 胚乳. epi, 果皮内側表皮. epo, 果皮外側表皮. eps, 種皮表皮石細胞. oc, 油細胞. os, 油状物質. pc, 果皮. sd, 種皮. sti, 石細胞層. vb, 維管束.

図2

の小形で壁が厚い細胞層が一列見られる。胚乳細胞は比較的大きく多角形の細胞で脂肪油及び糊粉粒を含んでいる。胚細胞には糊粉粒を含む。でんぷん粒は径三〜一八 $\mu\text{m}$ で円形、球形を呈し、層紋は不明瞭、へそ点は点状、星状の明瞭な単粒及び二〜六個からなる複粒である。

『重修本草綱目啓蒙』に「一種マツブサト云アリ、一名ヤハラヅル、ウシブドウ、マツブドウ、モチカヅラ、ヤハラカヅラ・冬枯ルコトハ北五味子ニ同ジク花モ亦同ジ實モ亦穂ヲナシテ生ジ熟シテ黒色ナリ故ニウシブドウ云フ此草蔓ヲキレバ松ノ氣アリ故ニマツブサト云フ・コレモ亦和産ノ北五味子ナリ、南五味子ハサネカヅラ一名ピンツケカヅラ、トロロカヅラ、ビナンカヅラ、フノリ山野共ニ多シ藤蔓共ニ甚繁茂ス、葉冬ヲ經テ枯レズ・實ハ熟シテ赤色乾シテ赤クシテ潤ナシ苦味多シテ五味備ハラズ和ノ五味子ト名ケ賣モノコレナリ、薬舗ニ販者數品アリ朝鮮五味子ハ形大シテ久經ル者毛潤アリ色黒クシテ白キカビ

ノ如者アリ五味全備ル上品ナリ」、『本草集解』の「南北ノ二種アリ五味子ハ朝鮮ノ産上品ナリ故ニ方昼ニ朝鮮五味子ト云リ又北五味子ト云朝鮮國ハ中國ヨリ北方ニ當ル地故ニ名リ是ノミニアラススヘテ朝鮮産ヲ北ト称ス享保年中ニ朝鮮種渡リ今世中ニ多シ・和産モアリ駿河辺ノ山中ニ多シ松フサト云リ或ハウシブドウ、松ブドウ、ヤハラヅルト云ヘリ、蔓ヲ切レハ松ノ香アレドモ香ツヨシ故ニ松フサブドウノ名アリ一種南五味子ト云ハ和名サネカヅラ、ピンツケカヅラ、トロロカヅラ、ビナンカヅラナリ」の記述にあるように、マツブサを五味子の代用とし、ビナンカヅラを南五味子として流通した時代があるが、今では全くない。性状は径約六mmの液果で、暗赤色〜黒褐色を呈し、表面にしわがあり、また、しばしば白い粉をつける。果肉を除くと腎臓形をした種子一〜二個を認め、その外種皮は黄褐色〜暗赤褐色を呈し、つやがあり、堅くてもろい。中国に南五味子が流通するが、原植物は

(*S. sphenanthera* Rehd et Wils.)、甘肅省、浙江省、四川省、湖北省、湖北省、陝西省、雲南省などに分布、生薬名は華中五味子、五味子に類似するが原植物は葉質稍厚く、葉片は倒卵形、楕円形、或いは卵状披針形、両面緑色。花は単生し、橙黄色を呈し、花被片は六個、雄蕊は十〜十五。河南省、陝西省、甘肅省に多く産する。生薬の性状は不規則な形を呈し、径二〜五mm。表面は暗紅色或いは褐色、果皮は肉状で薄い。光沢はない。種子一〜二粒を含む。種子は腎臓形で外面は黄褐色(図1)。顕微鏡で観察すると(図2)、果皮の表皮細胞は類多角形を呈し、角質状。油細胞は類円形で径約八〇 $\mu\text{m}$ 。種皮の表皮は石細胞状で長さ五

〇 $\mu\text{m}$ 、径二〇〜三〇 $\mu\text{m}$ で内壁は肥厚する。内部には褐色及び黒褐色の物質を含む。膜孔は小さい。表皮下の石細胞は長円形或いは類円形、長さ五〇〜一二〇 $\mu\text{m}$ 、径五〇〜六〇 $\mu\text{m}$ で壁は厚い。その他中国国内には、紅花五味子(*S. rubriflora* Rehd. Et Wils.)、真藏五味子(*S. neglecta* A. C. Smith)、披針葉五味子(*S. lancifolia* A. C. Smith)、翼梗五味子(*S. henryi* Clark)、中華五味子(*S. Propinqua* [Walls] Bail. var. *sinensis* Oliv.)、毛葉五味子(*S. pubescens* Hemsl. Et Wils.)、緑五味子(*S. viridis* A. C. Smith)、等の名で流通する地域がある。生薬名称に則した五感を重視、商品の使用を促したい。



岡田 稔  
(おかだ・みのる)

昭和三十五年、東京薬科大学卒業。同年、(株)津村順天堂(現・(株)ツムラに名称変更)に入社。入社当時から植物を基本とした生薬の形態学を専攻。傍ら薬用植物の栽培と品種改良、新品種の作出・育成等を行い、生薬全般の品質評価・判定を担当する。